

第2日目 総括討論

司会(勝井)：お話を聞きまして、3人の先生から補足的なお話がありましたら、それをまずお伺いして、それから総括的な討論に入っていきたいと思えます。全体の時間は約2時間ぐらいを用意してございますので、もう時間に余り拘泥されなくて組んでおりますので、思う存分していただきたいと思えます。

そして、そのあと本学部の早田さんにサマリトークをお願いします。

それでは、早速でございますが、最初に、林先生からお話ををお願いします。

林：昨日、お話ししましたことの補足と申しますか、最初の効能書きが多くなりまして、実質的なことが非常に少なくなりましたので、きょうは少し実質的なことを補足しておきたいと思えます。

昨日、全体的な国・民族の問題ということをも国民性という集合概念としての問題の話をいたしました。その結果、いろいろな国に総括的には普通考えられるという関係が見つかった。ところが、それを細かく見ていくといろいろな問題点、違った点が起こってきたという入り口のところをお話ししたわけでございます。

きのう、お話をしました人間関係というふうな問題を考えましたときに、温かさを尊重するというふうなオーダーというのは日本が一番であって、それからブラジルの日系人、ハワイの日系人、それからドイツ、そういうことでアメリカとイタリーは離れています、両極端に。こういう話をしました。それから中間的な回答を見ると、日本人が一番外れている。全体的には多くなって、オランダとアメリカがはっきり物を見ているということで、アメリカと日本というのは非常に違った様相が出ておるわけでございます。



ところが、これを一般社会知識の方で比べてみますと、日本とアメリカは非常に近い。どうしてそんなに近いのだろうと、これよくわからないわけではありますが、本来近いのか、占領の影響かという問題が私よくわかっておりませんが、現象的には甚だ近い、社会意識が近いという問題になります。一番最初にこういう問題、これは非常に簡単な問題でございます。

次に挙げる生活領域のそれぞれについて、あなたが重要だと思える程度に従って1から7評価をつけてみるという質問です。家族や子供についてどう思うか、職業、自由になる期間、友人、知人、両親、兄弟、姉妹、親戚、宗教、政治、重んずるパーセンテージをとりました。これは全体的にこういう問題ですから非常に回答の幅が狭い、非常に片一方は重んじなくて、重んじるという答えであります。総体的に非常に近い、近い中でいながらどこが多いかという形でランクをつけてみました。1番というのは、一番これを重んずる、子供や家庭を重んずるのはアメリカでございます。日本は職業や仕事が一番多い、政治が日本人高いと、そう言わなければいけないと思っているらしくて、アメリカも高いのでございますが、こういう問題が出てまいります。ドイツはなかなか低い、こういうことがあり

まして、これをもとにこのグラフを再現する、そのランクが近いものを近くなるようにつくる方法を用いまして、それを図を書いてみました。

それを眺めてみると、これはアメリカと日本、かなり近いところにあるのです。対局にあるのはイギリスとフランスでございまして、ドイツもちょっと入っています。これはオランダ、こう見ると、こういうような問題に対して日本とアメリカは近いということがわかってきます。

さらに、こういうふうなことを調べてみました。いろいろな全体の質問をとりあげました。人間関係と中間回答とはもう明らかなんですから除外しました。こういうものにくくってみました。経済と帰属意識、不安、先祖、家、宗教、科学文明感、健康と生活、満足、金に対する態度、金志向かどうかという問題でございまして。経済に対する態度、これからの見通し、人間に対する信頼感、家庭に関する近代、伝統、政治的主義、主張、これはいろいろなクエスチョナリイがまざってくるわけですが、これを各国ごとにこういうものが一体どういうふうな回答のパターンを示すかということを実際に調べてみました。

そうすると、こういうふうな領域を分けますと、どこの国でも一次元的にスケールをすることが解りました。それがおもしろいのでございまして。つまり、経済ならポジティブ、ネガティブ、不安感なら不安が多いか少ないか、先祖、家ならば伝統的か近代的かというふうに、すべてそういうふうなきれいに分かれてしまう。そういう物差しをつくるということがわかりました。どこの国でも同じ物差しをもってはかることができる、つまり、意思の疎通することは非常によいです。考えの筋道はみんな同じようではございまして。経済に関するときにポジティブ、ネガティブで話をするときいろいろな問題行きちがい

おこらず、相当問題が少ない。それぞれ、この中ではみんなそういうふうになりまして、それぞれの国のオーダーがついてございます。どれの国が一番ポジティブ、どこの国が一番ネガティブかというオーダーがついてまいります。そうしますと、不安に対しては、一番不安が少ないのはオランダで、その次はドイツ、日本でございまして。それから、先祖は、先祖を重んじる方だということになりますと、一番は今度はアメリカでございましてイタリア、ドイツが一番少ないのでございまして、日本は3番目。科学文明感が一番ポジティブなアメリカ、イタリア、フランス、ドイツが低く出ます。ドイツという国は普通の予想に反して極めてある意味でネガティブに見えます。家庭は近代的、そういう意味で、我々の昔の人が持つイメージとドイツは非常に違っております。しかし、人間関係は温かい、先ほど言いましたように人間関係だけは温かい、そういう傾向を持っております。こういうランクオーダーが出ました。これをもとに先ほどのように計算をしてみました。そしてグラフを書きました。

こういう問題に限っていうと、今度は、やはりさっきと同じように日本とアメリカは近い、イタリアとフランスが近い、当然オランダとドイツが近い、イギリスはほぼ真ん中に。こう見ると、よその国であって、総体的に日本とアメリカは近い。こういう一般的意識に対しては非常に近い関係。極言すれば、非常に大ざっぱに言えば、極めて健全です。アメリカと日本は健全だけれども、やっぱりヨーロッパはそういう意味で、ある意味で言えば退廃しているという感じを受けられます。それは見方の差でございましてけれども、近いですね。

そういうことを見ると、さっきまで非常に人間関係、中間回答では差がございました。ところが、こういう社会意識に限ってくると、今度は日本とアメリカは非常に近いと、これ

を見ると、アメリカと日本の関係、表面的な関係はかなりうまくいくと、かなり考え方が近い。こういうふうなことがございます。

今度は、これは総括的に見た話です。今度は個人にばらしてしまいました。個人にばらしてしましまして、いろいろな国の個人的にどういう意見を持っているかという、今の状況踏まえて、金志向には、金志向か否かということで、それから信頼感、人間に対する信頼感があるかないか。政治的主義は、民主主義、資本主義、社会主義、それから経済では明るい、暗い、これ名前をつけたわけでございまして、一次元にするのはさっきで全部示されているわけです。不安感、不安感あるとなし、家庭は近代的、伝統的。先祖、宗教では伝統を重んじるか重んじないか、健康感はポジティブかネガティブか、科学についてはポジティブかネガティブか、こういうふうに分けられるわけございまして、これは勝手にやったのではなくて、データからこういうふうになったわけございまして。

そうして、これは全国全部込みにいたしました。そうすると、ネガティブ、中間、ポジティブというふうに分かれることが、三つのクラスターができることになります。全体はこういうふうに通すとポジティブ、ネガティブがわかってくるのがわかります。だからああいふ分け方が一応の妥当性は持っているということになるわけです。これをもとに国の特徴を描いてみました。そうするといろいろなことが出てまいります。ここにアメリカがございまして。ここに日本が、こういう問題に対しては日本とアメリカは近い、イタリア、フランス、ドイツ、オランダ、イギリス、さっきと同じになります。これはさっき国全体のトータルでした。今度は個人にばらしています。個人にばらして国の特徴をあらわすと、やはりさっきと同じようなことになります。

そうすると、それぞれの周りにある国の特

徴というものがでてまいりますから、それは一体どういう特徴であるかということ調べてみます。フランス、イタリアの暗さ、経済に対してはネガティブな感じを持っている。人間の信頼感が少ない。フランスは健康感もネガティブなくあいで。それからイタリアが不安が多く、社会主義論というのが一つのフランスとイタリアの特徴でございまして。日本はアメリカクラスだと、これは3根目で分離しますが、あとは同じでございまして。経済がポジティブ、家庭は伝統的、民主主義、資本主義好みだと。先祖、家、重んじる、科学文明がポジティブ、こういう形が出てくるのが日本とアメリカです。それから、今度はオランダ、ドイツのクラス、家庭は近代的、先祖、家は重んじない、科学文明感、ネガティブ、不安感なし。この三つが特にドイツの特徴でございまして。

ここにありますのはそれが共通している。この二つ、これは日本とフランスとイタリアが共通しているということは金志向、それからアメリカとオランダ、ドイツが一致しているのは人間の信頼感あり、健康観ポジティブ、そういうところが一致している。イギリスの真ん中のところがその特徴であとは特徴ございせん。こういうふうなことで、ああいふように領域に分けて、その中の個人のパターンを見ますと、国の特徴というものがこういう問題に対して浮かび上がってきています。

ここで一番ポイントなのは何かといいますと、やはり日本とアメリカが近いという問題でございまして。つまり日本とアメリカは非常に近いものと遠いものがあるということですよ。国によっていろいろな物の考え方によって、こういう点ではこの国に似ており、こういう点ではこういう国に似ていると。似ているということは違ったところもある。それを仕分けをしないで物を見ると誤ってしまう。これをそれを全部総括すると、最初にお話ししましたようなああいふ図が出てくるので

す。物によってはぴったりしている。それを全部ひっくるめて、調査票全体をやるとこういう形が、こういうふうに日本、アメリカ、フランス、そこに日系人が入ってくる、こういう形が出てくる。さっきの分析でなぜ日系人が入っていなかったかという問題があります。実は日系人、ハワイで調査をやるときに、分析が終わりまで進んでやればよかったのでございますが、それが出来なかった。日系人を調査するとき、どうしても日系人固有の問題を放り込まなければいけなくなった。そのためにある質問を抜かなければいけなくなったのです。抜くときに、これはつまらないと思った質問を抜いてしまいました。我々がつまらないと思った、これは分析結果ではございません。我々は主観的につまらないと思って抜いてしまった。それが悪かった。それがキー・クエションであることが後でわかった。しまったとしてもどうにもなりません。やった後でございます。今度やるときにはきちっとそれを入れてやるわけでございますが、そのキー・クエションの一つ、非常につまらない問題でございました。つまり、科学文明感の問題です。例えばこういう問題が解決できるかと、つまり、科学がだんだん発達すると、人の心まで解明できるかと、こういう問題があります。あるいは科学が発達すると、社会、経済問題はすっかり解決するかと、こういう問題を抜いてしまったのでございます。それがしかし一つのキーであったわけで、そういう問題がありますと、よその国はそういう問題になりますと、かなりポジティブですね。ところが日本だけですね、猛烈に反対、よその国は5、60%そういう答えになりますね、日本は10%、14~15%です、両方とも。人間が関係すると科学は信頼されてこない、いや、いろいろな人文社会科学は大変だろうと思います。信用されておられません。幾ら心理学をやったって人の心はわからないよというわけでございます。経済問題や

科学なんてわかるものではない、そう思っているわけでございます。私が思っているのではないのです。みんなが思っ、それにポジティブな人が十数%しかない。

ところが、物に対しては極めてポジティブです。この25年間にがんは治る、日本がトップでございます。老人性痴呆の問題は解決する、核廃棄物の完全処理は可能である、これは日本がトップであります。宇宙生活になると、日本はやっぱりだめですね、人間が入ってくるとだめです。それが日系人で、どうなるかというところが解らなくなりました。実に残念なことをしてしまいました。

それからもう一つ、病気にかかった、つまらない話でございますが、この一月、こういう悩みを持ったことがあるかという質問。背中が痛い、頭痛がする、偏頭痛がする、うつになる、不眠症にかかる、そういう問題でございます。これはフランス人が一生懸命出してくれというので入れた質問でございます。やってみると、フランスが極めて高い、なるほどと思いました。それ以上のことはわかりませんでした。アメリカも高いですね、日本はもちろん低い。ドイツも低い。それだけではおもしろくない。今度は男女差を見ます。男女差を見ますと、大体女の方がそういう病気にかかりやすいことはどこの国も同じでございます。その幅がアメリカとフランスは極めて大きい。女の方が極めて悩んでいるわけでございます。日本は非常に男女差が少ない、ああ日本の女って幸福ではないかなと思いました。やはり厳しい社会なのでしょうね。そういうことがわかりました。これは日系人でどうなるか、なかなか興味深い問題でございます。それは偏頭痛があるということではなくて、それが一つの生活の中のインデックスになっているという意味で非常に大事だということです。つまり、ストレスをどの程度社会が受けとめているかという問題です。

今度はそれだけではつまらない。今度は不

安感,あるいは経済的なポジティブ,ネガティブとクロスをしてみました. その間の関係を見てみました. そうするとヨーロッパ諸国は全く独立でございます. そういう病気のことと社会に対する不安感, 経済に対するポジティブ, ネガティブ, 全く独立してございます. ところが, その二つがぴったりくっつくのが日本とアメリカでございます. 例えば背中が痛くならないということと, 経済的なポジティブという意見が非常によく一致するのです. 日本とアメリカです. 興味津津たるものがある. これをブラジル日系人とハワイ日系人でやったらどうなるかと, これが非常にポイントです. そういう一見つまらない問題を除いたために大失敗をしてしまった. 一見つまらないことは本当は大事なことだったので. 国際比較とはそういうものでございます. この次は失敗しないようにしたいと思います. ところが, そういうことで質問票の構成というものがあり方というものをもっと少し深く考えなければいけなかったと.

正に CLA でやったつもりではあったのでございますけれども, 本当はやればよかったのですが, 質問数の有限性ということをもってとうとう失敗してしまいました, 一つの例でございます.

そういうことで, いろいろな国やなんかは似たところと違うところがある. それには質問をある仕方で仕分けをすることが非常に大事であると思います. こうして, 我々の取り扱う範囲内でそれをだんだん拡大していくという問題があります.

それから, 思わぬ問題にひっかかりから新しい問題が見てくるということがあります. こういう手探りの現象を扱うものですから, そういう問題が見えてくるというような観点が大事ではなからうかということで, ちょっと補足させていただきました.

司会(勝井) : どうもありがとうございました.

田中(譲) : 私の方は, ビジュアルに, もう少しインテリジェントパッドのいろいろな機能を見ていただきたいと思います. ビデオを使って説明させていただきます (ビデオ上映).

例えば, パッドというのは紙ですから, 切り取るというメタファーとしても役に立つということで, 切り取るということ自身も一つのジェネリックな機能だというふうに考えて, 台紙にそういう機能を持たせているのですね. 台紙の方に任意のパッドを置いてやると, こんなふうに切り取ることができます. 切り取ったものをそれぞれアップデートすることも可能です. 穴があいた方も同様にアップデートすることができます.

台紙の方はあらかじめ, ああいうふうにレギュラーな形状を確立しておきますと丸いパッドをつくって丸く切り取ることができます.

これは, 実は実際の電卓の写真を撮って, その上にボタン等は全部透明のパッドにしてしまって電卓を作ったわけですね. こういうリアリスティックな部品をつくるということも可能です. ここでやっていますのは共有コピーです. これは独立したコピーでつくったものです. 次は, 状態共有をつくる形でコピーをつくったのです. 一方で操作しますと, もう一方も同様に動作します.

インテリジェントパッドは, 部品をジェネリックなコンポーネントとして定義することを非常に大切にしています. いろいろな機能を新たに分離する場合も, それをできるだけジェネリックなパッドして導入してやりますということを行ってやります.

例えば, こういうスプレッドシートがありますね. スプレッドシートのセルをはがし, そのかわりに電卓を持ってくるということも可能です. そうすると今度は, 電卓で計算した結果というのがセルの値として下のシートに得られます.

今度は、バーメーターをセルに貼りつけたのですが、バーメーターは0から1までの値というふうに設定しますので、バーメーターを動かすことによって、その値がセルに設定されて、そして、下のスプレッドシートでは、それに応じて計算が行われます。今度は、セルを置きかえるのではなくて、その上に電卓を置いて、そしてなおかつりサイズして、ボタン等は見せないようにして、共有コピーをとっている、もとの電卓の方から操作をして、その値を伝えるということになります。イコールボタンが押された地点で、その結果が下に伝わって計算が行われます。

きのうのビデオでもありましたが、CAIのシステムで、今、釧路にいらっしゃる野口先生が我々の所にいらっしゃったときに研究をなさったものなのですが、ここではバネとか滑車というのは透明のパッドの上にアニメーション表示されてますね。そして、貼り合わせたときに、貼り合わせる場所によって、どういうスロットに結合するかということが自動的にわかりますので、スロット結合をユーザーが指定するのではなくて、各パッドが自動的に行うという機能を持たせてあります。それによってデータのやりとりをして、それであたかも各部品がスロットを介してつながるように、それぞれの表示位置を変えることによって連携動作を表示するわけです。今バネを二つつないで、さらに上端に止め金を置いて、下端には重りの入った箱を追加しました。これで、浮いている端点というのはなくなりましたので、システムは自動的に計算を行って、ばねの伸び縮みを、それぞれの部品の間でデータを授受することによって、このシステムの形に落ちつかせたのです。

この例では、各ロープにかかっているいろいろな張力をモニターするためのプローブのパッドが貼られています。

それから、この例は、一番下の台紙にそういう機能を持たせているのですが、一番下の

台紙に、完全に合成し終わった状態と、それからばらばらの状態の両方を覚えておかせて、後からボタンを押すことによって、ばらばらの状態から自動的に合成させるとか、あるいは今度は逆に、合成した状態からばらばらにするというようなことを自動的にこなせるようにしたところなんです。こういうツールがありますと、この上でユーザーに自由に結合させますと、途中でユーザーがどう結合しているかわからないというときに、結合ボタンを押すだけで、あとはシステムが自動的に結合してくれるというようなことになります。こういうものをプラモデルキットと呼んでいるのですが、こういう形で、プラモデルキットの形をとってユーザーに提供するというのも一つのやり方でないかなと思います。こんなものがたくさんありますと、ユーザーは、そういう例題を幾つかやることによって、どんなふうに結合したらいいかということがだんだんと理解されてきます。

この例では、上のパッドといますのは、計算自体はネットワークを介して別のマシンで行いまして、それをビジュアライズして表示をするということをやります。上の方のパッドは、遠隔地にあるスーパーコンピュータとやりとりをするための機能を持っていますので、そういったものをプロキシーパッドというふうに言っております。きのうのデータベースに対してのプロキシーパッドと同じようにですね。今、表示のところにはスナップショットをとるようなパッドを置いて、スナップショットを取り出したのですが、今この下でやっているのは、そういうスナップショットをとるパッドを、あらかじめ何枚かとったスナップショットに対して、自動的に再生をするということを見せてみたわけです。

これも、我々の所に1年間いらした王子製紙の方が、製紙プラントのシミュレーションにインテリジェントパッドを用いた例です。

製紙プラントのフィルタの数を一つ増やしたわけですが、そうすると自動的に結合が再表示されてパイプが追加されたわけですが、なおかつ下の台紙でもってシミュレーションのパラメータもそれによって変わります。シミュレーションを開始して、いろいろなバーメータをモニターするというようなことが可能です。

おもしろいのは、こういうものができ上がりますと、このレイアウトをそのまま保ったまま一番下の台紙をシミュレータから、本当の実際のプラントに対する制御を行うプロキシパッドに置き換えていきますと、これでそのままプラントのコンソールパネルが構築できるというようなことになります。

これからお見せするのは、パッドの配置をいろいろと制御するためのパッドです。今お見せしているのは、こういうふうにはパッドを貼っていきますと、1階層のツリーの形にいろいろなパッドを並べてくれるというそういうパッドです。それ自身もパッドですから、それをさらにほうり込んでやりますと、2階層のツリー型、木構造型のパッドディレクトリが簡単に構築できるわけです。

これは、それを応用した例で、ある合成パッドを入れてやりますと、その合成パッドの貼り合わせの状況というものを、こういうふうにはツリー構造で表示するような、そういうツールが簡単に構築できるわけです。

これも今の例と同じなのですが、今度は横方向に展開するのではなくて、放射状に展開していくのです。ここに、今右側にあるのが、同じ機能を持ったものなのですが、台紙を透明にして、なおかつ展開の半径を短くしています。ですから、そういうものを加えてやりますと、ちょうどサテライトを形成して、またその周りに展開されていくというような構造を簡単に構築することができます。

今度は、ファイルフォルダに相当するものですが、いろいろなパッドがそこに入ってい

ます。クリックすると、それが前面に出ているわけです。こういう機能も、台紙そのものに定義していますので、ここにほうり込むパッドには何ら変更を加える必要がありません。任意にパッドをほうり込むことができます。そうするとファイルフォルダの中に入って、それをクリックすると前面に出てくるというようなパッドができ上がるわけです。これ自身もちろんパッドですから、ああいうふうにはほうり込んでやりますと、ファイルフォルダの中にファイルフォルダがあるというようになりカレントな構造というものを簡単に構築することができます。

これは、台紙を用意してやって、一定の大きさの台紙を用意してやって、それにいろいろなパッドを並べた形でファイルフォルダの中にほうり込んだ例です。

このように、今お見せしたものは、全部台紙そのものにそういう機能を持たせています。

そういう台紙が一つ増えることによって、いろいろと新しい、管理であるとか、表示であるとかというようなことを行うことができるようになります。もちろんそういったものを、さらにいろいろ組み合わせると複雑な構造を、管理構造をつくるということも可能です。

これは、いろいろなパッドを登録することができるパッドでして、登録したパッドの縮小したイメージがインデックスとして上の方に行った、そのインデックスを、その部分をクリックするとそのパッドがポップアップしてきます。

今度お見せするのは、これは、ハイパームービーと呼んでいるものなのですが、このムービーの中には、いろいろなボタンを隠しています。今、左側の各ドアにボタンが貼ってあって、一つのドアをクリックしたのですが、その部屋の中に入って行くというムービーが、それによって呼び出されたわけですが、今度、この中の各学生にもボタンが貼ってありま

す。ある学生をクリックしましたので、その学生のクローズアップのムービーが出てきたわけです。このムービーも全部パッドになっています。

こういう技術を使いますと、ムービーの中の任意のオブジェクトに対して、それが位置と大きさを変えても、それに応じて追従するようなボタンを構築することができます。

オーサリングの方は、このようなツールを使って行います。これもすべてパッドで作られたツールなのですが、今サーファーを囲むように透明ボタンを貼っているのです。サンプルフレームも幾つかとりまして、毎フレーム毎にとる必要はないのですが、あのボタンの位置とサイズを変えながら追いかけていくわけです。その間は、線形補間を行っています。こういう簡単な操作でもって、先程のようなシステムを構築できるわけです（ビデオ終了）。

ビデオはこれくらいにしまして、こういうふうにパッドというのは、いろいろな機能というものをできるだけ相手を選ばない形で定義しておく——そういうのを「ジェネリックに定義する」というふうに呼んでますが——、そういうジェネリックな機能部品というものをたくさん構築していくということが、こういうパラダイムを成功させる一つの鍵なのです。それを、最初、我々はメディアツールキットということでやっていたわけなのですが、すけれども、その数というのは、非常にたくさん必要なわけです。しかも、どんどんどんどん多様化する必要があるということで、いわば、こういったものが完全に消費文化社会におけるいろいろな商品、そういったレベルにまで発展していかないといけないだろうと思います。芸術家が創る作品というようなものよりは、むしろ、どんどん大量生産される、どんどんどんどん多様なものが大量生産されるというような形でつくられていく。

そうすると、ソフト自体の考え方もかなり

変わってくるわけですね。何十万円もするようなソフトを売るというよりは、数百円のソフトを大量にというような考え方に切り替えていかないといけない。ところが、こういうシステムというのは、実は諸刃の剣のようなところがありまして、例えばこういう技術を1社が独占して持ってしまうと、いろいろなアプリケーションシステムをいとも簡単につくれます。いろいろな例があるのですが、大体3倍から30倍ぐらいの効率アップになります。そういうことを考えると、こういうものを普及させるというのは非常に難しい部分があります。それはかなり時間がかかっている一つの理由なのですが、最近になってインターネット上でいろいろなソフトが無償配布されて、無償配布することによって、そういうコミュニティーを形成してしまっていて、それからビジネスをやるといって、そういう考え方というのがかなり定着してきました。

それによって、日本でもこういうアプローチに理解を示してくださる方がだんだんと増えてはきたのですが、やはり、まずは場を形成する。例えばインターネットの時代は、ビジネスでは非常におもしろいこともあります。例えば私鉄がどんどん、何にもない所に線路を引っ張って、そしてそこに住宅地を造成してというような基盤をつくっていくのですが、それからビジネスになるようにしていくというようなこととよく似たところがあります。インターネットの世界では、場をつくるということが、場をつくること自身はいとも簡単にできるのです。その場に人々を集めるためには、いろいろな情報、あるいはコンテンツがそこに集まらないといけない。集まることができるようにするというのは、非常にポジティブ・フィードバックのかかった世界なのです。

例えば、昔からあるダイアログというデータベースがありますけれども、ダイアログ社のデータベースというのは、どんどん

ん、または、研究者があそこに登録してほしいということで、情報をそこに自ら集めるようなことをするわけです。ですから、ある場が形成されると、その価値が上がって情報がますますそこに集まってくる。問題は、そういうアトラクタを最初どんなふうにして形成するかということが非常に難しいところなのです。どうもまだ日本では、そういうビジネスの展開の仕方というのが定着していないというのが大きな問題ではないかというふうに思います。

アメリカの人たちというのは、そういうことは非常にわかっているようです。彼らは、最初はわからなかったのでしょうかけれども、いろいろやっているうちに、彼らは余りリスクを恐れないですから、いろいろやっているうちに、こういうものの考え方というのでやるわけです。そういうのをいろいろな言い方をするらしいのですけれども、「ファックス・エフェクト」とか「ファックス効果」という表現を使うことがあります。つまり、ファックスマシンというのは1台だけあっても全然その価値はないわけで、いろいろな人がこれを持たなければいけない。そのためには、最初はファックスマシンを配ってでもビジネスを展開したり、それから——ちょっとまずい表現かも知れませんが——「ファースト・ショット・ビジネス」とかという言い方もするみたいで、これは麻薬なのです。要するに最初の1本はただでやるというような、そういう言い方も……(笑)。こういう考え方というのは、かなりこれから必要になるのではないかなというふうに思っています。

司会(勝井)：どうもありがとうございます。

貝沼：昨日のいろいろ御議論いただいて思ったのですが、やはり私が非メディア論的アプローチと名づけたことによる刺激がかなり強過ぎたという感じが致します。いわゆるこういうネーミング自身にも問題があったかもし

れません。まだ多少誤解がないわけでもないのではないかという感じがします。私がメディア論的アプローチと呼ぶものと、それから、私の報告の論点との関係をいまい少しはっきりと関係づけてお話をさせていただきます。それで補足に代えたいと思います。

私がメディア論的アプローチ、これは、実際はそれぞれの論者は細かく本当は仕分けしているわけではないので、或る意味では恣意的かもしれませんが、メディア論的アプローチと呼んでいるものとして、大きくいえば二つを念頭に置いています。

その一つは、実はここでは余り俎上には乗せませんでしたけれども、いわゆる技術論的アプローチでもいいでしょうか、テクノロジーアプローチといいましょうか、一言でいいますと、新しい技術が社会を変え、文化を変え、人間の行動様式を変えするという仮想に立っている、そういう観点に立っている見方だろうと思うのです。

例えば、実は、私は、東海電波監理局が事務局をやっていますが、ニューメディア懇談会という、いわば情報化をローカルのレベルで推進していく一つのエージェントになっているのですけれども、そういうところで少し、実際の推進のためのいろいろな調査研究に携わっています。自分が関わっている仕事を批判するのもあまりよくないのですが、そこでの基本的発想法というのは、やはり先にいろいろな情報システムありきなのです。いろいろなアプリケーションがあるのですけれども、その地域にいろいろな情報メディアを普及させることが大前提で、それを誰がどう利用するかということは二の次の話になってしまうところがあります。これは、やっぱりアプローチとしてはいささか問題があるのではないかという気が致しております。そういう意味で、こういう技術論的なアプローチは私はとるべきではないという立場に立っているわけです。

もう一つは、昨日の報告でお話で主に取り上げたものです。これは、本来なら今申し上げた技術論的アプローチとは違う立場に立っていないかならなければならないと思われるものです。さまざまなカルチャースタディーズのことであり、関西大学の阿部潔さんの言葉を使えば文化論的アプローチと呼ばれるような流れのことです。昨日の報告で、一番最初に技術ありきの発想の中に「同一性の論理」があるのではないかというようなことを申し上げましたけれども、この文化論的アプローチをとっている人たちの中にも、結果的に技術論的アプローチと同じようなトラップにはまり込んでいく欠陥がありはしないだろうかというふうに私は思っています。

そのことについて若干、説明します。昨日ははしょってしまったのですが、レジユメの6ページのやや下の「情報社会の三つの秩序形成要因」という見出しがついている部分なのですが、そのところに註2があります。ちょっと読みますと「少なくない極めて良識的なメディア論的アプローチにも二つの予断があるように見える。一つは、今日の社会秩序を「モダン」として一括して批判の対象にする。そして新しいコミュニケーション・メディアやそれがもたらすであろう新しい意味によって「モダン」を脱構築しようとする。二つには、情報化によって、時間、空間の障壁は崩壊した、あるいは崩壊しつつあるので、コミュニケーションは極めて容易になった」。つまり、私は「モダン」の脱構築というのは予断なのではないかというふうに思うのです。これに対して疑念を差し挟みたいのだということをそこに書きましたが、つまり、この考え方の背後には、いわば技術論的アプローチの立場とは逆の意味であるが、例えば新しい意味とか、新しいコミュニケーションというものが社会や人間を変えるのだという、やっぱり一種の予断があるような気がするのです。確かに大づかみに言えば、そうなっ

ていくのかもしれませんが、実際上そこに至るプロセスというのは、大変な紆余曲折を含んでいる。またさまざまな権力、権力闘争なんかも含んだプロセスを辿らざるを得ないだろうと思われます。そういうことを考えますと、この文化論的アプローチはいささかナイーブ過ぎるのかなという思いがちょっとしてしまいます。ただ、これは危惧でありまして、私はこれに対して確かに批判的でありますけれども、全く、例えば意義を認めてないということではなくて、先日もちょっとお答えしましたけれども、テクノロジー、技術論的アプローチよりは遙かにシンパシーを感じているわけです。

ただし、これだけで「だから非メディア論的アプローチだ」というのでは、確かに根拠が薄弱のような気はするのです。むしろ私は、これが仮りにネカディヴな理由だとしますと、ポジティブな理由としましては、まさに情報社会の秩序問題が挙げられるわけです。私の主要な論点というのは、情報社会になってどういう社会秩序が形成されるのかということをつかんでおく必要があるだろうということですね。

例えば、非常に形式的な事例なのですが、コンピューターのネットワーク上で、バーチャルな空間に新しい意味が付与され、意味を指示するとします。或いは都市空間においても人々が日常生活を通じてですけれども、何か新しい意味をある場に与えたとしますね。そうするとそれがどういう人たちによってなされたのか、またその意味付与がなされたことによって、どういう時間、空間を超えた相互行為が生み出されているのかということが問題になります。そんな相互行為の具体例を考えてみたのですが、例えば、田中譲先生も先程、おっしゃっていましたがコンピューターによる新しいコミュニティみたいなもの、そこにはビジネスも含まれていると思います。それはまさにコンピューターを

メディア、媒体とするコミュニケーションのネットワークですね。こういったものが現実にはすでにかなり形成されているわけですね。或いは都市の場合でも、例えば、これは田中先生からいいアイデアをいただいたのですけれども、祝祭とかいったものになっていくわけですね。ただ、それがまたいろいろな具体的な社会制度とか或いは規範みたいなものに結晶化をしていくということを考えざるを得ない。考えねばならないわけです。例えばコンピューターの問題なんかでいきますと、昨今も問題になっていると思いますけれども情報公開法とかマルチメディア法とか、そういうような問題になってきます。都市ですと新しい都市のたたずまいといいたいでしょうか、そういったものとして構造化されていくわけですね。またそれが逆に、そこでさらなる新しい人々の意味づけを状況づけていきます。実際に状況づけていくということが進んでいく。形式的な説明で恐縮なのですが、このプロセスは、実は単純ではなくて、いろいろなエージェントが関わるわけです。ですから、そういう意味では非常に矛盾に満ちたと言いたいでしょうか、葛藤に満ちたプロセスであろうと思います。非常に長い社会過程みたいなものを具体的につかんでいく、そういう努力をやりたい、やらねばいけないのではないかという私の課題意識なのです。ここに私の主要な論点があるのです。

仮にそういうことをやろうとしますと、もちろんメディア論でも、文化論的アプローチでカルチャースタディみたいなことを想定していますし、確かに権力論みたいな議論もたくさんそこにはあります。ですから決してできないわけでもないのですけれども、やっぱりメディアオリエンティッドな形では落ちこぼれてくる問題が余りにも多いように思うのですね。いずれにしても、人々のまさに日常的な実践としてのメディアの利用の仕方というようなものは、別個にきちんとした分析が必

要なのではないかということです。

そういうことを考えますと、私の論点、私の課題を果たそうとしますと、メディアオリエンティッドというより、プラクティスオリエンティッドといいたいでしょうか、あるいはエージェントオリエンティッドな形での理論構築を考えざるを得ないわけです。そういう意味で、非メディア論的アプローチというふうに名づけたわけです。

ですから、いわばメディア論的アプローチに対して、全くトータルにメディアを批判する立場だろうと判断する方がもしおられれば、そんな誤解は解いていただきたいと思います。

仮にプラクティスオリエンティッド、あるいはエージェントオリエンティッドな形で理論を構築しようとするすると、これも本当は大きな問題、私がこれを言うこと自体が果たして適切であるかどうかというやや重い問題にぶつかります。すなわち、二つぐらいの大きな困難がすぐ待ち構えているわけですね。つまり一つには、現実の今、日本の中でも起きている情報社会の諸現実をリアルに分析する方法とそれのための理論的な枠組みをどうするのかという、非メディア論の方法論の問題があります。メディア論で行くのであれば、方法論とまではいかななくても或る程度の手かかりというものはあるのだろうと思います。けれども、そうではないわけですから、これをどうするかというのは大きな問題ではあるわけですね。そこを、とりあえずはギデンズなんかの議論を手かかりにしてこういうことを申し上げたかった。

もう一つ、実は今回の報告では触れられなかったのですけれども、本当はもっと大きな問題があります。つまり、エージェント或いはエージェントの問題がそれです。これまでの社会理論の範囲内で限定させていただきますが、それこそマルクスから始まり、ウェーバー、デュルケームら、近代社会学と現代社

社会学のさまざまな理論的な知見をあみ出した人々において、特にそこにおける構造と主体という概念をどういうふうに吟味、再吟味するかということ、恐らくこれは避けて通れぬ問題であったのだらうと思うのですね。

これは、文字通りに社会理論全体の再構成という大きな努力の中の位置づけで考えていかなければいけない問題かと思えますけれども、そういう問題に本当は突き当たるわけです。そういう意味では、私の論点というのは、言うは易く、行うは難しでして、非メディア論的アプローチというよりは、むしろまさしくギデンズの言う構造化論のアプローチになるのだらうというふうには予測できるのですけれども、しかし、あえてそこに進まざるを得ない。

以上のことを申し上げまして補論とさせていただきます。昨日の報告の位置関係を明確にするお話をしましたので、御理解いただけるとありがたいと思います。

司会(勝井)：ありがとうございます。

司会(勝井)：これから総括的な討論に移ります。

狩野：最初、林先生に伺いたいのですが。

私は、しばらく前に、ある心理学会に招かれて特別講演をしたときに、日本には、数理に基づいて生産的に思考する研究者は非常に少数である、ほかのものは行儀作法として統計を身につけていて、何らかのもっともらしさを出すために統計処理をしているだけだ、一見して統計的な有意性を利用している点と、そこから得られたものより先に、本人の中に先入観あるいは偏見があって、それが一つのある条件やグループが寄与したときに、そうだと思っているだけだと申しまして、その当時の一流と言われている研究を一つ一つ照らして、数量化を徹底すると別な理解が生まれるはずなのに、そこに至らないで、あらかじめ持っている偏見に基づいて解釈した故に陥ったと指摘しました。そのときに私は、

少数のという条件をつけたのが、今はよかったと思います。先生によって、やはり数理的な処理が生産的になっていったという感じをいたしまして、そのときには、林先生の業績は知っておりましたけれども、心理学者とは思っていませんでしたので、社会学あるいは心理学の中においても、いわば第一級の業績に近づいているのではないかと、そう思いました。

というのは、私たちが国民性の問題、あるいはその途中で県民性等について論議をされた方もおりましたけれども、そのナショナルキャラクターは、先生はいろいろ留保つきで名称を与えていらっしゃいました。これは、この以前に、ベーシックパーソナリティーのストラクチャーだとか、あるいはモーダルパーソナリティーとか、言われてた一連のことがございまして、それはフランスのマンタリテ・コレクティブともまた関係があって、一時期、こういう形の研究は隆盛でした。先生の、統計的な方法を駆使されて、その中の相関を解析されることを通じて、そしてある関係を確認し、さらに徐々に調査の枠を広げて、他国におけるキャラクターをとっていくという形でお進めになっているあり方が、とにかく一つの的確な方法と分析の進め方として、きのうから大変興味深く拝見をしたのです。

ただ、私にとりましては、その内部構成の問題がどのようにしてそのようになるのだらうかという、つまりパーソナリティーストラクチャーというふうなもの、つまり、昔の考えでは育児習慣とか、その土地における神話構造とか、そういういろいろによってそれらがつくり上げられていき、そしてそれが支えとなって一つの特有のパタンをつくり上げていくというのが、一つの理解なのですが、それが国民性の差として出てきたとき、そこからどう形成を理解できるか、そこからどのような形で私たちは知識を利用可能な状態で、

実際的な何かが進む上において、有効な指針というものが得られるのだろうか。そこを、先生はどのようにお考えかというのが一つなのです。

ちょっと長くなりますけれども、今から35、6年ほど前に、私は教室でも、先ほど申しましたような基礎的パーソナリティー構造というようなものに興味がありました。これは、精神障害者の集団というようなことを考えていく中で、そういう興味を持ったものが出てきたということがありまして、それで、中部ネパールのヒマラヤ山系の大体4,000メートルぐらいの山肌の、2,000メートルぐらいのところにへばりついている小さな孤立した山村を対象にいたしまして、そこでの定着調査をしたことがあります。最初は数カ月、あとは1年、2年の年月でもって定着。どういう理解をするかは、私たちにしてみれば、ロールシャハテストとか、あるいはいろいろな心理的な検査の用具というのは使い易いのですけれども、むしろそれを使わないで、文化的な異和感というものを手がかりにして、本人がその中で、自分のいわば国民性とこれは違うぞというところを条件発生的に調べ上げていく。その上で、これは数百人の規模の孤立した山村なものですから、全員に対してインタビューをして、調べるという仕方をとったわけでございます。

その中で、成人の意識としては、盗みはいけないというようなことが出てくる。そして、実際上、カラギリン村という村では、ほとんどけとばすとドアがあくぐらいのきゃしゃなドアですけれども、異常なくらいしっかりした鍵と錠をかけている。そのときに、それがどのような形で発生してくるかということ調べる。幼児期においてどうであって、少年期においてどうであって、大人になってどうであって、大人のどういうふうな者が盗みをしないか、そして盗みをする者はどうか、盗みをする者はどういう意識を持っているか、

盗みをしない者はどういう意識を持っているかということ調べることができます。

七つから八つくらいの子は、つかまると非常に悄然といたしまして、とにかく悪いことをしたという態度なのです。11歳から12歳になりますと、ほとんどしらっといたしまして、とにかく何が悪いのだというような態度をとる。それで、成人になると、一応は謝るけれども、だれでもやっていることだという態度になる。盗みをする者は盗みをするし、盗みをしない者は盗みをしない。盗みをしない方に、盗みは悪いことだということの非常にはっきりしたモラルスタンダードというものがある。意識レベルで、質問応答でやった場合には、これは文章による質問集でありませんで、インタビューによる反応ですけれども、盗んだ者も悪いことだと言っているのです。ただ、問題は、悪いことだという以上に、何かがあるということインタビューアは感じているのですけれども、盗んだ側の方がそれ以上に話す言葉を持っていない。それは一体どのような形で調べれば、本人が持っている本当の意識がわかるのだろうかという感じがいたしました。それは、その当時から先に余り進まないで、今日まで至っているのです。

それで、今のは実は長い前置きになりましたが、きょうの話をお聞きをいたしまして、一つ感じたのは、例えば、年がたって、子供の世話にはならないという意識が、昭和30年から40年過ぎぐらいのときに、非常にはっきりと私たちの調査にも出てまいりまして、一体これは何だという感じがいたしました。というのは、その当時の生活事実ではそういう実情は余りなかったのです。しかし、調べていきますと、本当にその人はそう言っているのではなくて、やはり強がりであったり、そのようにあきらめたいと思っている一種の消極的な意味合いであるべきあり方として子供の世話にはならないと言っている。実際、こちらがやや通常の面接以上に超えて問いただ

していきますと、実は世話になりたい。しかし、子供がかわいそうだというような意識が強い。しかし、彼らが、この20年の間に、着々と子供の世話にならないで済む状態をつくり上げたのですね。だから、そのときの、先生の本にも出てくるかと思うのですが、あり方がどういう形できいてくるのかという形では、一つはやはり社会的なエトスとして、ある社会が老人は公共的な形の世話というものを中心に、子供の実質的な負担にならないようにしようという条件が進んだのかもしれない。それからまた、本人たちは、そのときは建前として子供の世話にならないとしか言っていなかったと、私たちが調べたときに感じたそのことが、長いことそのような形の準備過程を経て、老人になったときには、見事に孤独な状態になって、それで喜んではいませんけれども、現実化している。

先生はベーシックパーソナリティとか、あるいはその基礎になっている人生とかというふうなものは、注意深く避けた状態で解析をされていらっしゃるんですけども、しかし、あそこに出てくるのは、かなり重大な予測も含んでいるのではないかと思います。そういう点で、先生は、一応完成の域に達したと思われまますので、今までお調べになられたことは、ここから先が質問ですが、今後の日本あるいは各国の生活のあり方というふうなものに、どういう意味と示唆を与えるものなのだろうか。そのことは、ある面にはおいては、私は非常に意識というふうなものが私たちの生活の質を何らかの形で変えていく一つのあり方を検証する事態にもなるのでないか。そういう点で、今のことだけに絞ってお願いしたいと思います。

林：狩野先生の言われていることは難しく、答にくいと思いますが、最初の場合に、国民性研究の成果をどういうふうにご利用するかという問題でございます。日本の内部では自己創造・改造の一つのてがかりになると思

います。国民性の流れにのった自己創造ということになります。国際関係で言えば、一番端的に言って、日米摩擦というふうな問題が起きてきた。そのときに、一番私は思いましたのは日系人なのですね。アメリカ社会における日系人のステータス、だんだん高くなってきた。ところが、移民問題というものは国のレベルであっては、非常に避けて通っている問題なのです。ある意味の棄民なのですね。日本の在外公館は日系人と対応することを非常に嫌がるのです。日本人も日系人と対応するのを非常に嫌がる。非常に孤立したものののです。日系人というものは、

私は、それを見ていて、それはやっぱりちょっとまずいのじゃないかと思いました。日系人と似たところがあるというところ、非常に多くの点で似たところがあるし、アメリカの社会にも似ている。そういうところからはっきりしてくると、全体的に日系人の、言葉は悪いですけども、活用方法があるのではないかと思いました。日米摩擦における解決策のカギがあると考えた。それを一つの媒介として、日米摩擦解消の手段というのが考えられるのじゃないだろうかというふうな気が一つはしているのです。

日系人の感じていますのは、これはいろいろな3世、4世の問題なのですが、連中は、今まではそう考えなかったのですが、自分のアイデンティティーというものを考え出したのです。そうしまして、アメリカ人と自分は思っているが、何か違うというのです。これは何だろうと、こういうことを考えるようになってきた。それで、その人が日本に来ていろんな風物を見たり、人に接したりすると、自分の違っていたところは、自分の日本的なところなのだということに気がついてきた。ターニング・ジャパニーズというようなことが非常に言われているのです。心の中で、おれはやっぱり日本人でもアメリカ人でもないのだと、そういう自覚を持ち出した。そうい

う本がいっぱい出ています。

そういうことで、今度はロサンゼルスですか、全日空の所長さんが熱心な人で、年間のプロジェクトで25人位、日本に6カ月間ぐらい日系人を呼ぶのだそうです。その記録が出ております。それを見ると、やはり同じなのです。みんな同じようなことが書いてある。それを見ると、やはり若い日系人はそろそろそういうことに気がついてきていると思います。確かにデータでもそういうことになっている。一つの活用として押さえる点があるのじゃないだろうか。つまり、日系人の集団適応性はこうなのだという事です。これを一つの組織として、どういうふうにかけ橋の組織ができるかというふうな手がかりになるのじゃないだろうか。一つの今考えている活用の方法でございます。

活用の方法のプロジェクトを今出しているのですが、研究費が通ればしめたものですが、そういうふうなことを一つ考えております。

あとは、いわゆる文明論の問題。理解と衝突。いろいろな民族の衝突、そういう問題を一つのポイントとして考えられないだろうかという気がいたします。葛藤緩和のカギがあるように思えます。

それから、あとの方の問題は、なかなか発生過程というのは難しく、国民性があれば、それぞれ社会制度が変わっているということとございますので、それを克明に調べていくと何とかなりますが、これはそれぞれの専門領域でやらないと、手に余るような気がいたします。教育制度一つにしても、各国でみんな違うと思いますが、それはやはり私は国民性の問題が関連してくるのでないかというふうに考えております。

生活の仕方になりますと、例えば社会全体の雰囲気非常に異なっている。集団的な意味で個人主義が強い国が多いわけとございますが、その中に立って、フランスとドイツは非常に違う。ドイツの方が、やはりゲマイン

シャフトを指向している。それはまた、言語の問題にも関係してくるのでないかというふうなことも考えられるのじゃないかと思えます。そういうアプローチはできると思えます。

どういうわけでドイツはそんなにはっきり物を言わないし、人間関係が緊密ということになると、ドイツと日本の共通点で言えば、両方とも封建主義の時代にしっかりついています。地方がしっかりしている。そういう意味のコミュニティーと言っていいか、小さい社会がドイツではいまだに存在しているのじゃないか。私はすべて全国を歩いたわけではございませんからわかりませんが、時々思うのは、いわゆる部落単位の部落、非常に緊密なのです。葬式があると、全部の人がお参りに行くような形なのです。だから、そういうものがやはり残っているのじゃないか。それから、大都市がないですね、ドイツには、ベルリンだけは特別ですけども、30万都市というのはそんなにたくさんございません。小さい都市が分かれている。そんなことも関係しているのじゃないだろうかという気がします。

狩野：30年くらい研究の蓄積があったというふうに考えますと、やはり横断的な比較だけではなくて、縦断的な変革していく文化の関係みたいなものを、できる限り均一に解析をしてみますと、世代的交代のような形で、どこの世代からどこの世代にこういう意識が広がっていくとか、そういうふうなことはわかるのでしょうか。

林：それはわかると思います。これは、時系列を見ていけば、日本でも40年ぐらいの時系列を見ますと、どういう問題でコーホート効果が強くて弱いかという問題がわかってきます。

例えば、日本の問題で見ると、コーホート効果は男と女を比べますと、女の方がコーホート効果は多いのです。つまり、ある意味の教育効果がより強く残るのですね、女の方

が、男はステータスが上がると、どんどん意見を変えてしまいますので、ですから、女の教育というのはとても私は大事だというふうに思いました。女子教育というのは、日本の根幹、変わることが少ないからです。オランダの宗教教育の時の話と似ているのです。これは非常に大事なポイントではないか。そんなことで、いろんな質問で見えてまいりました。各国でこれをやると大変で、日本だけはそういう点で、かなりわかってまいりました。人間の心の動きですね、世代間の動きからわかりました。

それで、思うと、コーホート効果が強いのですが、それとやはり社会情勢がありますから、例えばコーホート効果である特徴を持つのが、年をとってくると、加齢かあるいは社会情勢かで、その山がだんだん低くなっていくのですね、そういうことも見当がついてまいりました。

井上：今の点については、一言で、女子教育がいかに大事かという話に持っていくと、ちょっとポイントがずれる気がします。もっと違った分析をするべき現象の存在を示すデータではないのでしょうか。例えば、女性の社会的な活動の制約とか、固定化とかというような話ができるデータだと思います。

田中(一)：総括的な討論ということで、問題が少し大き過ぎるかもしれないのですが、林先生と貝沼先生にお伺いしたいと思うのです。もし後で時間があれば、田中譲先生にも一つお伺いしたいのですが。

これは、社会学を含めた社会科学というもの認識に関することだと思うのですが、多くの社会学やその他のお仕事を拝見しますと、次のような形になっていることが多いかと思うのです。それは、社会現象に対するフィーリングや、あるいは多くの方が論ぜられているところから、知見を論理的に取り出されて、それをもって、他のいろいろな社会現象を理解する。そういうふうなパターンに

なっていることが多いかと思うのですが、果たしてその知見を取り出すというところでは、それは概念的思考というもので結構かと思うのですが、理解するという段階に入ったときに、その理解の内容が主観的理解を離れて客観性を持ち得るためには、常に林先生がなされたような社会調査の結果に裏づけられなければならないことかどうかということなのです。そのことが、現在可能かどうかということとは別にして、本来の社会学とのあり方として、そうなるべきものなのかどうか、そこをちょっとお伺いしたいと思うのです。社会学では、社会調査と社会理論と二つあって、重要な柱になっているように思いますけれども、必ずしもそれはそれぞれの柱としてであって、両方の関連がどの程度あるのかということについては、余りよく論じられないものですから、現在可能かどうかは別にして、本来どうあるべきかということについて、ちょっとお伺いしたいと思うのですが。

林：お話のように、私は、そうあるべきだと思っておりますけれども、調査の方の限界というものがございまして、それはどこまで広げるかという問題が現在ございまして、ですから、今までの統計学という範囲内では、とてもこれぐらいしかわからない。いろいろやっているうちに、データの数まで広げて、それで今この辺まではわかるようになってきたということがございます。

それで、それと、やはり理想としては、あるべきだと思いますけれども、現実問題として、限界がどうしても出てくるのじゃないだろうか。

田中(一)：私も、その方法について現在のところ限界があるということは、十分よく承知しているつもりなのです。しかし、その限界を超えた方法は何かということを探ることが、今後とも意味を持ち得るかと思うのですけれども、現在可能かどうかということとは別にいたしまして、本来どうあるべきかとい

うことについて、大変荒唐的な議論で恐縮なのですが、お伺いしたいと思います。

林：私の立場というのは、やはり技術屋でございまして、現在の方法論をどこまで伸ばせるということになります。そこでデータの科学ということを考えてきたわけですが、やはり内側から見えていますね、どうしても見方として、将来はいつでも、限界点、外に何か残るといふふうに思います。科学で100%わかるとは思っておりませんために、どうしてもそうなります。だけれども、希望としては全体にいきたいというふうなつもりです。それ以上ちょっとお答えしにくいと思いますが、そういうふうな感じを持っております。

狩野：あらかじめ、実験物理学を大分超越しておられますから、そういう意味では、どうぞ御気軽にお考えになった方がいい。

貝沼：私は、社会学にずぶずぶにはまり込んでおりますので、どういうお答えしていいかというのはかなり深刻な問題なのですけれども、社会学は、そもそもという言い方をしますと、ある意味で規範にかなりこだわってきた学問なのです。よかれあしかれ、いろいろあるかと思えます。例えば、モダンの規範というのは一体いかにあるべきなのか。モダンの規範が一体どういう問題を抱えているのかということ、ずっと格闘してきた科学なのだ。その格闘の中で、例えばE. デュルケムのような形で、本当に実証的に、それこそ人間の行動や、ある意味では内面にまで数量化を試みるようなチャレンジというのでしょうか、つまりその限りにおいては、いわゆる社会調査と社会表象のかなり緊密な結びつきを指向する流れがある。それは、現代科学、現代社会でもかなり大きな主流になっているのは事実だと思います。

ただ、反面で、M. ウェーバーみたいないき方が、やはりそれぞれの価値観あるいは世界観というものから離れて科学はあり得ないのではないかという。だから、余計だから

こそ、お互いの見方をフェアに見ようではないかというような価値自由性の観点もあるのではないかと思うのですけれども、そういう意味では、社会理論、いろいろな社会的な現象を見る場合に、結局調査では把握できないところを、それぞれの価値観や理論で演繹するという、そういう思考もやはりある。そういう二つの流れみたいなものがあります。後者はどちらかというと、最近では細々たるものではないかという感じがしますが、ただ、これは現象の説明であって、本来どうあるべきなのか、私は意見を言うのはつらいのですけれども、本来的にはやはり社会学と銘打つ以上は、社会的実践と理論が車の両輪になるということは間違いないと思っております。私が昨日来からお話ししていることの本題は、ある意味で、基礎経験の裏づけという意味で、客観的なレベルまで話を持っていかないといけないと思っております。確かにこういう目を持って話したつもりなのですが、反面、それにもかかわらず、やはり情報社会のいろいろな諸現象に関して、現在の限界云々というのは、質問の範囲内から外れると思うのですけれども、でも、やはり現在の諸条件というのは、どこまで数量化で把握できるのかということ、かなり限界があるのではないかという認識は僕は持っているのです。

林先生の大きなお仕事について、言及するのはちょっとおこがましいのですが、かなりマクロなレベルでのまさに国民性調査だと思います。林先生のお仕事というのは、いわばものすごく個人的なレベルでもありませんし、あるいは、ある程度実体的な形で国民性があるのだというような前提に立ってのお仕事ではないと私は推察しているのですけれども、ただ、いろんな出てきたデータから、まさにラッピング、くくるのです。国民性をすくい上げておられるのではないかというふうに思うのです。そういうレベルの調査とい

うのは非常に有効だと思いますけれども、それを、例えば、私が申し上げているような、それこそ個人が無意識的に動機づけられ、あるいは意識的行動をして、それが一体どういう合意に結びつき、かつ社会的な行動についていくのかというマイクロから、中間点に当たるレベルまでのところと、どうやって研究的に結合できるかというのは、正直申しまして、私は自信がないのですけれども。

田中(一)：質問について、釈明的補足をしますと、私ももちろんすべての自然現象の認識が実験的結果の単なる総体に尽きるとしているわけでは決してありません。確かにファクトとそれからファクトの直接示さない内容というのも、多分に把握する必要があるかとは思っているのです。

ただ、あのようなシンプルな質問をあえてしたゆえんなのですが、もし日本の社会科学が世界的権威を持ち得る内容になるとすれば、例えば本来社会科学はどうあるべきかとか、本来社会学がどうあるべきかという問題が子供じみた議論ではなくて、いつも頭の奥底に大きな柱として据えて、常にそれに問いかかけをしながら仕事をしていくという態度が必要なのではないか、かねがねこのように思っていたものですから、つい今日もそのような質問を申し上げたのです。

ついでにと言うのも大変恐縮なのですが、田中譲先生に伺います。張り合わせるということは、非常に普遍的な有効な一つ的手段であるといえますと、次のような位置づけが可能ではないかというふうに思うのですが。それは、例えば私たちの認識が頭の個々の脳細胞とその神経繊維のシステムで支えられるとしますと、その個々の神経細胞の働きを、時間・空間共有性の実体化という形で把握できるのではないか。その上で、これらのいろいろな有機的なシステムの結果として、形式論理学の基礎的な、形式論理学の公理と思われるものも出てくるのではないかと僕は

思っているのです。そういう意味で一つの論理的な発展を考えたときに、張り合わせというものの持ついわば論理的内容があるのではないか。張り合わせを単なる一つの情報処理的な手段だというふうに受け取られがちかと思うのですけれども、そうではなくて、その手段が有効である根拠はこういうところにあると言い得るのじゃないかなと思ったのです。

田中(譲)：大変難しい問題なのですからけれども、実はそういう問題意識を持っております。1979年ぐらいからですので、もう20年ぐらいになります。一方で、語彙構築ということに、私自身非常に興味を持っていて、それを論理に照らしてして定式化するような手法をずっとやっている研究なのです。ちょっとこれは、ここしばらくは、休んでいるのですが、それが意味では、パッドの貼り合わせということになっているわけなのですが、どういうことかという、語彙を構築していくときの一つの語彙も同じなのですね、部品がそれぞれ周りに持っていて、それを論理的な定義する、ある種のある分野における論理的な定義する中で、それぞれの語彙というのが、その場でどういう意味を持っているか。その場との関係を保ったまま語彙を組み合わせることで、言葉を組み合わせることで、新しい言葉を定義していく。それも、もともとの文中の中で新しい定義が得られてくる。そういう演繹される、そういうシステムを考えているのですが、実はその研究が先にあって、それが手順パッドというものを生み出した一つの契機にはなっています。それとの関係もある程度はつけているのですが、ただ、まだ満足のいく形にはなっていないというのが現況です。

それから、貼り合わせという非常に単純な構造にこだわっている理由というのは、田中一先生の今の御質問とは直接関係はないのかもしれないのですけれども、ちょっと参考に

お話ししますと、僕自身は、創造性というのは、完全な自由の中からはかえって出てこないのではないかというふうに思うのです。ある種の制限というものをうまく入れてやることによって、かえって創造性が誘発されるのではないか。というのは、完全な自由の中では、第一歩をどこに踏み出したらいいかということが非常に難しいことになる。つまり、試行錯誤をやるといっても、試行の方の空間が、可能な空間が大き過ぎて、どこに踏み出したらいいかということがなかなか定まらない。ところが、例えばレゴブロックのような世界ですと、特に目的を持っていなくても、いろいろ組み合わせているうちに、おもしろい組み合わせが見つかって、それが創造性を誘発することになって、意味のあるものにまとまっていくというようなことがよくあるわけですね。

日本には、古来、いろんな何々道という、茶道、華道、そういうのがありますが、そういうところで非常に型というものを重んじて、非常に制約を課したところから、いろんな空間をそう想発していくという文化があるわけですが、あれに非常に僕は共鳴するので、そういったうまい制限というものを適度に入れてやるということで、ああいう貼り合わせという制限を持ち込んだというのが裏の話なわけです。

林：最後にこういう話をするのはまことに申しわけないことで、しらけてしまうとぐあいが悪いという思いもあったのですが、いつかお聞きしておかなければいけないのじゃないかと思ったのです。

戦後、また割に最近になりまして、いわゆる学際的な学問領域でということで、いろいろな新しい名前がついた学部がきてきたのです。社会情報学もこの一つの領域、情報科学も同じですが、いろんなものが出てきた。それを見ると、やはり学問というのは、発達するためには、一つの固有の方法論がなけれ

ば、発達しないのじゃないかという気がしているのです。

よく使われる数学なんて、いつまでたっても数学科で、看板は塗り替えられないですね。何百年も塗りかえていないのじゃないかと思いますが、応用数学というのは、確かに応用数学という名前で盛り切れないものが出てきたのです、数理科学というふうに看板を上げている。応用数学というのは、非常に範囲が狭過ぎたものですから、数理科学。これはこれで一つの方法を持っておりますが、数学ほど固有の方法がないのですね。そのために、やはり数理科学もさしたることはない。統計学というのは全然また違った意味の固有の方法論でして、確率を土台にもってきて現実に対応するかということで、固有の方法を持ったわけです。ところが、数理科学は包括はしたけれども、固有の方法がやはりないのですね。ねらいは違っても、固有の方法というのはないのです。

そういうように考えたときに、例えば社会情報学といったときに、学会としては非常に立派に成立してそう呼べるかと思いますが、学問領域としてそうして括ることが、本当に、当分野において発展するだろうかということが非常に心配なのです。つまり、そこで固有の方法を一刻も早く見出さない限り、表面だけ扱って、寄せ集めみたいな形で進んでくる。10年もそうやって陳腐になりますと、また名前を書きかえる。そんなことになりはしないかというのを心配している。何か固有の方法が出てくるとすれば、どういう方法のものであるかということのを少し教えていただければありがたい。そんなふうな気がしている。田中一先生、いかがですか。

田中(一)：これは、今、ここで出た御質問の中で一番難しいですね。でも、御質問の意味は非常によくわかりますし、また、そのような率直な質問を今まで下さった方はいらっしやらないのです。何となく社会情報学とい

うものが形をなしているかのようなフィーリングを前提にした議論が随分多かったかと思うのです。

私は、今おっしゃられたところ、それを一番考えなければならないことだと思うのですね。いろいろ考えてきました。今、申し上げることが、あるいは全く違った内容を間違っ

て考えているかもしれませんけれども、昨年の秋ぐらいから現在まで考えていることです。

まず、方法というのは、対象になる手がかりがあって、出てくるのだと思うのです。方法だけが先行いたしますと、その中身は寄せ集め的になりがちだと思います。現在では、対象はおぼろげながら形をとってききましたが、その対象が生み出す方法、固有な方法が何であるかということについては、十分はつきりまだ申し上げることはできません。では、対象は何かということです。それは、社会情報過程なのですが、その社会情報過程は、プログラムが可能な部分的過程、あるいは計算可能な部分的過程がある、そういうものの過程全体が計算可能でない過程、あるいは論理システムの外にあるような、そういう過程全体からできているのではないかと思っていますのです。言いかえれば、社会情報過程全体は、計算可能な過程でもありません。それからもう一つ、一つの公理システム、論理システムには公理が意識するかしないかに関係なく事実として前提されておりましてけれども、そのような公理システムには証明することも、その否定を証明することもできないような問題があって、社会情報過程はそういうふうな問題が主として内容を占めている過程でないかと思っていますのです。

今までは、それを積極的に取り上げることがをいたしませんでしたけれども、社会情報過程を考えれば、そのような問題に直面せざるを得ないのではないかと思います。では、それに応じた方法は何かと言われると、今のと

ころは、私は持っておりません。ただ、その方法を考えるためには、まずは情報科学的方法や概念、あるいは社会科学の方法や概念を使いまして、その上で、果たしてこの対象に即した方法が何であるかということを考えていきたいというのが、現在の考えです。でも、しばらくたてば変わると思いますね。これは、3年ほど前からそう考えてきたということですので、しばらくしたら、また変わるかもしれませんけれども、現在、そう考えています。

先ほど受け取っていただきました別刷は、そういうことの別刷です。

林：それで、最初の段階はこういう理論を使って、そこまでは何とかなる。それから一歩抜け出すというのは大変なことですね。しかし、それをやらない限り、深い学問にはならないのじゃないかと思っています。学部をあげて研究していただければありがたいなと思います。

田中(一)：そうしたいと思っています。確かにそれは困難だと思います。でも、困難ということと不可能ということは別のことです。そういう領域が領域として存在する以上は、それを理解する方法が見出せないというのは、人間の認識能力の限界を示すことになります。私は、そうは思いませんので、私自身が見出すことができなくても、必ずやそういう領域が存在する以上、これに応じた認識方法は、どなたかによって見出されるものではないかと思っていますのです。

林：そのときに、いろいろ問題、お話のとおりだと思いますが、対象のくくり型が問題。これは社会情報という面でもくくっていますね。もしもっと別のうまいくくり方があると発展するかもしれないという可能性もあるのじゃないだろうかと思っています。

田中(一)：それは、そう思いますね。

林：だから、くくり方が上手だと発展するし、下手だと消えてしまうという感じがあります

ね。

田中(一)：それはそうだと思います。その点は異論ありません。

狩野：今のことは、私もこちらに来た限りにおいては、自分の問題として考える必要がございませぬ。それを具体的に考えたのは、この学院に大学院をつくるという問題と関連が出てきたわけです。そのときに、現状としての社会情報学部は、博士課程は持ち得ないという考え方があります。つまり、博士課程に行った場合は、情報学と社会学に拡散する、あるいはその他に拡散する可能性がある。問題は、修士課程のアドバンスコースという形では、一つのインテグレーションを持つ専攻というものは、社会的にも可能だし、学問的にもそういう専門家を養成することは可能であろうと思います。

それで、その当時、田中一先生に御相談申し上げまして、やはり大学院をつくるとしたら、本来、その学問領域が何をなし得るか、という展開をなし得るかという形で考えるとすれば、まず博士課程まで考えた状態で修士課程をつくるかどうかというふうにするのが学部を建てていく上では本義だし、また学生を迎え、そしてそこにおける先生を迎えるときの基本になるのじゃないか。博士課程がいかに可能かということ抜きにしてしまっ、目先の需要があるからと、あるいはステータスシンボルとして修士課程をつくるというのは、大学人としては適当ではないのじゃないかと考えました。

今、林先生が御指摘になったように、後になってくり方が変わったときに、もう一遍それを取りかえるというような、今あるものはしなくて済むような形でやらずに、一貫した考え方とその条件を熟すべきだということございまして、これが第一歩の学部のテーゼになったと思うのです。

ですから、大学院をつくることについて余り不安はないようですけれども、問題は、今

おっしゃった博士課程の中において社会情報学部はいかに可能かというような、具体的に現実的な問題になってまいります。そのときに、先ほど話が出てまいりましたように、ここの学部では社会的な調査手法というものの習得を必修として課する。情報処理に対しては、その幾つか基本的な科目は必修として課する。そういうふうな形でなし得る研究者の仕事というふうなものが、どのような社会過程のあるものと適合するかという問題で、とにかく少し実用的な形で考えてみて、それが当面、博士課程においていかなる対象領域とそれから方法との間において、ユニークな結びつきがなし得る有効な局面というものが出てくるか。それが、一つイデーとして見出されたときに、博士課程を先に置いた形で修士課程にかなり順を追って進むことができるのじゃないかと思っています。

林：よくわかりました。

司会：ほかにどうぞ。山崎先生。

山崎：田中譲先生にお伺いいたします。パッドの機能と、それがユーザーに利用されていく過程が発展して行くということを、遺伝子になぞらえるというところは、とても興味深いと存じました。

ただ、遺伝子になぞらえることと、進化という概念を導入することは、分けて考えた方がいいのではないかと存じます。

なぜかといいますと、例えば突然変異という語によって、あるものがよいものになってしまうという意味合いを示していらっしゃると思うのですけれども、突然変異自体は、遺伝子自体が突然変異を抑制する方向に働いているものだというふうに私は理解していますし、また、突然変異自体も、生体の生存には不利な方向に働くものであるということは実験によっても確かめられていると思います。

ドーキンスも恐らくその点は、たしか認めていたのではないかと思っ、きのうちちょっと調べようと思いましたが、手元に資料がなく

て、あいまいな話になってしまって申しわけありません。

それともう一つは、進化という言葉自体が、カジュアルな使われ方においては、例えばあるものが変化して、すぐれたものになり変わるという意味で、辞典などにもそのように載っているのですけれども、先生の用い方ですと、もっと狭義の、生物進化ということのメタファですよ。それで、生物進化の定義を見ていきますと、結局、生物でないものから生物が生まれて、その過程には知的な思考力が一切働いていない、というところが進化論の主な主張で、その点はダーウィン以来変わっていないと思うのです。けれども、例えば、パッドを切り取って張りつけるという行為一つにおいても、それはユーザーが選択して行っているわけですので、そこでまず大きく一つ、背後に人間の思考力が介在しているという点で、完全なメタファにならないと存じます。するとかえって、ここで進化論を持ち出すことによって、先生の論を弱めることになるのではないかなという印象をちょっと受けてしまったのです。

それで、進化論でいっている自然選択というのは、やはり全く理知の介在しないレベルにおいてですけれども、ユーザーのパッドを使うか使わないかということの蓄積によって、取捨選択が行われるという意味において先生が進化とおっしゃったとすれば、やはりユーザーの思考力が背後にあるわけですから、ここでは、進化という言葉でまとめるのではなくて、新しい語をおつくりになっても構わないと存じます。それほど遺伝子についてのアナロジーはすごく興味深いと思ったのですが、進化という概念については、私自身は、持ち込まない方がいいような気がしたのです。それで先生のお考えの全体の中で、進化という考えがどのくらい重要性を持っているのかということをお尋ねしたいと存じます。

田中(譲)：ダーウィズムというのはいろんな批判を受けたのですが、それが一番物議を醸した最たる理由というのは、価値ということと結びつけられてしまったからですね。要するにどちらがすぐれているか。要するに、進化というのは、劣っているものから非常にすぐれたものと進化していくのだという価値観と結びつけられてしまったというのが問題になったのです。

それと同じことをおっしゃったように思うのです。僕は、進化という言葉を用いたのは、多様性を増すということだけです。そういう答えでよろしいでしょうか。

田中(一)：日本語というのは不便なところがありまして、言葉は思わぬ価値観を伴っています。価値観抜きに日本語の単語を用いることは、普通の場合、非常に困難なのですね。そういう意味では不便な言葉ですから、進化はその被害の一例かもしれません。

田中(譲)：それは、日本語だけでなく、要するに進化論は、かなりそういう問題はもちろろん、あらゆる問題を持っています。その最たるものがナチズムなのですね。

司会：ほかにどなたか。

井上：貝沼先生に伺いたいのですが、名古屋大学の情報文化学部という学部では、情報文化学部というものをどの様に考えておられるのでしょうか。

貝沼：田中一先生は大変見事に社会情報学というものの現状を分析していただいたので、実は内心それをお伺いしながら、自分の属している情報学部の現状をちょっと反省していたのですが、いわゆる純学問的なレベルの議論と、それこそこういう大学の学問を改組なり編成するといふときの現実問題として、人とか金とかという問題がつきまわってまいります。そういうレベルの問題でも、非常に難しい緊張関係というのがあるかと思うのですけれども、我々の場合は、正直申しまして、後者の方がかなりまさっていたのです。た

だ、今後のことを考えますと、ある意味で、メリットとしては一つの教養部を母体にしたということで、いろんな自然科学の先生方—物理、化学、生物などの先生方から、人文科学系のスタッフまで、ほぼ全領域がそろっています。

それと、とりあえずひとつキーのカテゴリーとして、人間情報学という、社会情報と人間情報とどう違うかという話もないわけなのですけれども、人間情報学というカテゴリー、それから情報文化という名がついていますけれども、人間情報学ないしは情報文化学というカテゴリーがあって、それを内部で議論していく、ある程度の体制はできているのではないか。

ただ、体制はできているけれども、これはただ潜在的な可能性でしかなくて、下手をすると、総花主義で、それこそ底の浅い、いろんなものがあるよで終わってしまう可能性も十分にあるのですが、札幌学院大学よりも少しおくれて立ち上がったということもあっ

て、また文字どおり純学問的な議論が学部の中かで十分進んでいるという状態ではないのですが、私なんかは及ばずながら、社会学の専門から、情報文化学の構築にどうかかわれるかという観点から、実は今日の話もしているわけです。そういう形で、私の役割は、これは単なる一つのブロックなり歯車でしかないかもしれませんが、一つ一つそういうブロックを積み重ねれたらなと考えております。本当に現状としては、今後に期待するとしか言いようのないお粗末な事態で申しわけありません。

司会：ありがとうございます。

まだいろいろご質問やご意見もあるかと思いますが、司会がまずくて、時間が少し予定を過ぎてしまいました。ここで補足的な講演ならびに総括的な討論をを終わらせていただきます。

最後に早田さんに、今回のシンポジウムのサマリートークをお願いいたします。